

2018年度ティーチング・ポートフォリオ作成 ワークショップ開催報告

井上千鶴子*1, 谷野圭亮*1, 北野健一*1, 古田和久*2, 川上太知*3, 東田卓*4, 石丸裕士*5

A Report on the Workshop of Teaching Portfolio in 2018

Chizuko INOUE*1, Keisuke TANINO*1, Ken'ichi KITANO*1, Kazuhisa FURUTA*2,
Taichi KAWAKAMI*3, Suguru HIGASHIDA*4, and Hirohito ISHIMARU*5

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。その後、ティーチング・ポートフォリオ研究会として毎年2～3回のワークショップを開催し、教育改善の研究に取り組んでいる。第21回には、初めて小学校教員の参加もあった。本稿では、2018年度に開催した第20・21回のワークショップの概要について、ワークショップ参加者の報告による教育改善効果の考察と検証を報告する。

キーワード： ティーチング・ポートフォリオ, 教育改善, メンティー, メンター, 初等教育

1. はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校（以下、本校と略す）は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ（以下、TPと略す）作成ワークショップ（以下、WSと略す）を開催した[1]。以後本校TP研究会は年2回（2011年度は3回）のWSを開催し、TPWSによるより効果的な教育改善の研究に取り組んできた。2019年5月現在では、副校長を含めた常勤教員68名中53名（約78%）がTPを作成している[2]。本稿では、2018年度に開催された第20回および第21回TP作成WSの概要について記した後、参加したメンティー及びメンターの感想と考察を記す。なおTPについての詳細、特徴等については既報[1][2]ならびに書籍[3][4]を参照されたい。

2. ワークショップの概要

参加した作成者（以下メンティー）と助言者（以下メンター）の人数は、表1の通りである。日程は、第20回が2018年9月5日～7日、第21回が2018年12月25日～27日である。第20回、第21回ともアカデミック・ポートフォリオ（以下、APと略す）作成WSと同時開催で実施した。内容はオリエンテーションの後、数回のメンターとの個人面談（メンタリング）を交えながら作成し、一方WSを運営するメンターはメンターミーティングでメンタリングの進め方の報告と検討を行っている。簡単なスケジュールを表2に示す。メンターミーティングを統括するスーパーバイザーは、東京大学の栗田佳代子氏（第20回、第21回）と首都大学東京の加藤由香里氏（第20回）にご担当いただいた。第21回には本校東田も担当した。

TPは高等教育機関を中心に広がっているが、初等・中等教育の教員でも作成することは可能である。2017年度に本校WSで高等学校教員の方がTPを作成された。2018年度は小学校教員の方が1名参加されてTPを作成されている。小学校教員のTPは、本研究会が把握する限り本邦初である。

なお本校のWSは、2013年にティーチング・ポートフォリオ・ネットワークが公開したTPワークショップ基準を満たしている。

2019年8月19日受理

*1 総合工学システム学科 一般科目

(Dept. of Technological Systems : General Education)

*2 機械システムコース (Mechanical Systems Course)

*3 電子情報コース (Electronics and Information Course)

*4 環境物質化学コース (Environmental and Materials Chemistry Course)

*5 奈良工業高等専門学校 (National Institute of Technology, Nara College)

表1 2018年度に開催したTP作成WSの概要

| | メンティー | メンター |
|------|-----------|-----------|
| 第20回 | 7名(内学外4名) | 7名(内学外2名) |
| 第21回 | 9名(内学外7名) | 9名(内学外4名) |

表2 TP作成WSのおもなスケジュール

| | 第1日 | 第2日 | 第3日 |
|----|------------------------------------|-----------------------|--|
| 午前 | | 個人メンタリング(2) TP作成作業 | 個人メンタリング(4) TP作成作業 |
| 午後 | オリエンテーション 個人メンタリング(1) TP作成作業 | 個人メンタリング(3) TP作成作業 | TP作成作業 プレゼン準備 TPプレゼンテーション 修了式 |
| 夜間 | 夕食会 TP作成作業 | TP作成作業 | 修了を祝う会 |

3. ティーチング・ポートフォリオを執筆して

教育理念を考える3日間(勇地有理)

私は着任して1年目の夏にメンティーとしてTPWSに参加した。着任してからの半年間は講義や学生指導などで起きる問題を場当たり的に対処することしかできず、どうすればよかったのかと反省することがたくさんあった。そうして悩んでいる時にこのWSに誘っていただき、実際に教育現場に肌で触れてから悩んだことを解決できることを期待して参加した。

多くの反省点は場当たり的な対応からくることだと考え、まずは自分の教育理念をじっくりと考えることにした。教育理念は自分の根幹をなす部分で、ここが明確だとこれを基準に短時間であらゆる判断をできるようになるのではないかと考えたからだ。しかし、いざ教育理念を考えようと思っても、これに従えばどんな判断でも瞬時にできるような便利なものは簡単に見つからない。そんなときに大きな力になったのはメンターの存在だった。福井高専の大ベテランである長水先生にメンターをしていただき、終始雑談をしているような雰囲気の中、私自身が教員になる以前の話も含めて今までしてきたことを振り返るようなミーティングを何度も繰り返した。そして2日間教育理念について考えるものの、なかなか良いものが思い浮かばずメンターとの最後のミーティングを迎えた。そこでこれまで話した自分がしてきたことを振り返って、なぜそのようなことをしてきたのか、なぜそういう選択をしてきたのかについて考えるように自然と導かれた。そしてそれを考えるうちに、なぜこういった授業をして、なぜこういう指導をして、なぜ多くの反省をする必要があったのかを考えるようになり、その理由

が自分の教育理念であることに気づかされた。無意識にこれがよいと思ってしていた行動の理由を明確にし、体系化することで、自分なりの教育理念のようなものを発見することができた。

いままではどういった理念のもとに教育をするべきという考えだったが、そうではなく、教育理念というものはもともと自身に内在しており、それを明確にすることで今後の教育につなげることができるものだという事に気づけた。この発想の転換は一人ではできず、3日間もの間、親身になってサポートして下さったメンターの長水先生の自然な導きがあったおかげだ。3日間教育理念を考え続け、苦しかった日々ではあったが、無事に納得のできる答えにたどり着き、これからの教育の道しるべを得ることができた有意義なWSだった。

TPWSの経験とその後の変化(伏見裕子)

わたしは昨年度、初めてTPのWSに参加させていただいた。もともと夏のWSに申し込んでいたのだが、開催前日の台風21号で被災し、生活道路や電気、水道を含むあらゆるライフラインが途絶えた。せっかくメンターの先生をつけていただいていたのだが、先生方から生活再建を優先するようにご配慮いただき、冬に改めて申し込ませていただいた。

結果的には、着任2年目が終わりに近づくなかで、やりたいこととやれることの折り合いのつけ方に対する悩みが深まった時期にWSを受講できたので、自分にとって最適な時期だったと思う。

具体的に言うと、自分の担当科目について、あまり授業を楽しんでいると思っていなかったのだが、メンターの先生と話しているうちに、それは方法が理念とずれていたからだということがわかった。何となく持っているつもりだった理念をきちんと言語化し、その理念に合った方法で無理なく授業ができるようになれば、学生も授業を楽しんでいると感じ、学習効果も上がるのではないかという希望を持つことができた。さらに、自分の教育理念に合った方法を具体的に提案していただけたことで、翌年度の授業計画を具体的に立てることにつながったと思う。

実際、着任3年目の今年は、WSでつかんだ自分の教育の「核」を重視し、特に全クラスを担当している1年生の授業形態を大きく変えたので、当該科目を受講する学生も自分も変わることができた！と実感している。また、校務分掌で力を入れている人権教育での理念と、担当科目での理念を結びつけることができたため、自分のなかで矛盾なく仕事に取り組めるようにもなった。

WSの3日間、メンターの先生は、こちらの話の内容に

寄り添いつつ、論理的に矛盾する点や聞き逃さない（見逃さない）ところは深く掘り下げてくださったので、とても信頼できた。わたしのとりとめのない話からうまくポイントをつかみ、導いてくださった栗田佳代子先生をはじめ、WSを支えてくださったすべての先生方に、心から感謝申し上げます。

自身の教育の根本を再確認出来た TP 作成（山下良樹）

私は2018年の夏のTPWSに参加し、TPを作成した。正直なところ、TPWSへの参加前は、WSが3日間みっちりあることや、事前の宿題があることなどからモチベーションは余り高くなかった。しかし、今後の昇任等で必要となる場合もあると聞いたため早いにTPを作成しておくべきかと思ひ参加した。

WSでは、一般的に本校の教員へのメンターは他の所属の方が付く様だが、私の場合は本校電子情報コースの早川先生がメンターとして付かれた。同じ高専にいながら、WSまでは話す機会が少なかったため、最初は緊張していた。メンターである早川先生とのマンツーマンでのやり取りが始まった。自己紹介の中で早川先生と研究内容で盛り上がったのを切っ掛けに、一気に距離が近づいた。また早川先生の丁寧で柔らかいご指導のお蔭もあり、自身のTPの本筋が見えてきた。

メンターとのやり取りの後に内容をまとめ文章にする段階は、詳細は忘れてしまったが、根を詰めての作業が辛かったと記憶している。メンターとのやり取り・文章作成を繰り返し、最後の発表となった。非常に短い発表であったと記憶しているが、普段の学会で発表する様にスライドの準備とセリフの練習を行った。発表では、高専に着任してから自身で作成した物理の演示実験用の器具を披露し、参加された先生方にも喜んでいただけたことが印象として残っている。

TPWSを終えて約1年が経った今でも思うことは、短期集中で辛かった記憶もあるが、全体としては非常に有意義であったと思う。自分自身の教育の根本は何であるかという事を再認識出来たことや、先生方の前で見せた簡単な実験だったが学生のように喜んでいただけ、簡単なものでも実験を見せることが大切だと再認識できた。現在は、本校に着任して3年目であり、まだ自作した実験道具や研究業績・高専や地域への貢献度は少ない状況である。もう少し時間が経ち、それぞれの内容が増えた際に、TPの更新もそうだがAPの作成にも挑戦したいと考える。短期間のWSは非常に辛く感じたが、TPを作成した時の達成感や時間が経ってからでも作成して良かったと思えたために、APに挑戦したいと考える。

遅筆で困った（吉田大輔）

わたしが参加した夏のTPWSの前日、大きな台風が大阪へやってきて、すさまじい風雨となった。間借りしている京橋の自宅は、前夜、停電した。どこからか紙のように飛んできた5メートルのシャッターが、近所の電線の上に落ち、火花をあげたせいである。冷蔵庫のアイスがすべて溶けたことを悲しみながら、このWSに参加した。以下、参加して感じたことを率直に述べたい。

わたしは、大阪府大高専・国語科に、2018年度、33歳で期限付き講師として採用された。この人事には感謝している。仕事がほんとうになかったからだ。とはいえ、1年ごとに更新される契約である。

わたしは浅ましい人間なので、そういう境遇に置かれていると、どうやったら次の年も契約してもらえるのだろう、と考え、不安になってしまう。こっちにも、ささやかながら生活があるのである。なので、わたしがこのWSに参加した気持ちとしては、がんばってることをアピールしたいという打算的な気持ちが強かった。

そういう不純なところで参加しているわたしのメンターになってくれたのは、大阪府大高専の金田忠裕先生であった。「私の金田」と言われている、こころやさしい先生である。いや、言われていないかもしれないのだが、わたしは、面談してもらっているうちに、彼に対してそう感じるようになった。金田先生がメカトロニクスコースのベテラン、わたしが一般科目の新人なので、ふだんあまり親しく話すことはないのだが、実に親切に根気よく話を聞いてもらい、助言していただいた。金田先生と親しく話せただけでも、このWSに参加してよかったと思う。

このWSでは、自分が大切にしている教育理念や方法を言語化することが求められる。わたしは、割合にはやく理念を言うことができた。それは、「創造性を育む国語教育」「抽象・具体、類似・差異の力を伸ばす国語教育」というものだが、理念化することにあまり苦しまなかったのは、それまでにたくさん履歴書を書いてきたせいだと思う。あちこちの大学に送った履歴書の類に、自分の教育理念をたくさん書かされてきた。ぜんぜん自慢にならないが、こうしたことを考えるのに多少慣れていたのである。

問題は、わたしの遅筆にあった。3日間ではぜんぜん時間が足りない。「はよ書きや」「とにかく書きや」と金田先生は励ましてくれ、そのたびに「はい、がんばります」「いまやっています」と元気よく答えるのだが、こちらの筆はかたつむり、という状況が続き、結局、書き上げることができなかった。自分でも驚くのだが、このWSか

らそろそろ1年たつのに、実はまだ書いている途中なのである。

金田先生にはそのうち、「私の金田も三度までやで」と言われると思う。感謝とともに、この場で謝っておきたい。

その代わりと言ってはなんだが、このWS参加と同時並行で書いていた授業の実践報告は書き上げ、すでに公表した[5]。わたしが国語教育においてどのような力を育成しようとしているのかの一端は、そこに述べておいた。

こころのどこかに、上記の実践報告を書いたのだから、TPはもういいのではないかと、という気持ちがあるのはたしかだが、これからもTPを書き継いでいきたいと思う。

※改めて確認しておきますが、TPとは、ふつうの方は、3日で書き上げるものです。(吉田注)

4. メンターを担当して

初めてのメンター作業 (川上太知)

2017年の冬に初めてTPWSにメンティーとして参加させていただき、その1年後に今度はメンターとして初参加させていただいた。メンティーとしてTPWSに臨んだ際は3日間自分と向き合い続けた場であったが、メンターの方が自身の根底にあるものを引き出してくれたおかげで良いTPが書けたのではないと思う。ただし、今回はメンターということもあり、きちんとメンティーの根底にあるものがきちんと引き出せるか不安になりながら始めたのを覚えている。

メンティーの専門分野は建築計画ということもあり、分野は異なるが専門分野の内容は比較的引き出しやすかったと思う。スタートアップシートに記載されていたTPの作成目的には「教育改善と昇格等のため」という一文のみ書かれてあり、ここからいかに引き出していかかが腕の見せ所だと感じた。スーパーバイザーの東田先生をはじめ、先輩方のアドバイスを踏まえながら進めていくことを心がけた。

初日の目標としては、「目次と理念のタネ」を探すことを目標とし、メンタリングを行った。最初は分野の門外漢ながら分野に関する質問を行う事でメンティーが話しやすい環境づくりを心掛けた。スタートアップシートに書いてあった項目を元に、「自身の教育指針と実際の現場とのギャップ」について聞いてみたところ、「着任初年度に出会った学生の学び方が自身にとって目標としている真の学びであると感じた」と話された。その部分を元に作成していけば良いのではないかと相談して初日は終了した。

二日目以降は前日に送られてきたTPについてスーパーバイザーや先輩メンターと共にメンターミーティングで相談させていただいた。中でも、「方法→方針→理念がボトムアップ形式でしっかりと結びついていないのではないか」、「理念の個数に対して、方法は何本ぐらいになるかを考え、結びつきを重視すること」という意見をいただいたのを強く覚えている。メンティーの方がメンタリングの際に答えを確認するような聞き方であったため、自身のオリジナリティをしっかりと出させるように軌道修正を行い、何とか完成にこぎつけることができた。

初めてメンターをさせていただいて、メンターの重要性を再確認させられたTPWSであった。そして、メンターに適切なアドバイスを与えることができるスーパーバイザーの重要性はメンティーをしていた時は感じる事ができなかったので新たな発見のあるTPWSでもあったと思う。

メンターを経験して (谷野圭亮)

筆者は2018年度2名のメンティーを担当した。2名とも同じ法人組織に所属しており、執筆理由が「昇任・テニユア権の取得」であったので、目標が明確でメンタリングの導入は比較的スムーズであった。

一方で、授業改善やこれまでの教育の振り返りといった内発性の高い動機ではなく、昇任やテニユア権を得るためにTPを書くという外発性が高い動機でのWS参加は、参加者の教育への内省を促すことや、改善のために前向きな方向性で進めることは難しいと感じた。参加者としては、TPWSは業務であり、できるだけスムーズに終わらせたいと思ってやってくる一方で、自らの教育観を掘り起こしたり、形成したりする作業は機械的にできるものではない。そこで、筆者は帰納的に教育観を導くために、実践方法や学生への向き合い方からインタビューを開始し、それらの点を線として繋ぐことで、1つの一貫性のある教育観の形成を助けようとした。

多くの分割された情報を1つの一貫性があるストーリーへ紡ぐには、それぞれの情報のコアを固定し、そこから枝を伸ばし、他の情報と結びつける必要がある。それらには、時に「マインドマップの作成」や「グラフィックオーガナイザーの作成」が役立つ場合が多い。一方で、それらを描くには大きなスペースと書き心地の良い文具が必要とされる。

通常、メンタリングには普通教室が割り当てられるが、今回は2回ともホワイトボードが設置された部屋を割り当てられ、構成や思考の整理の際に容易に図に書き出し、議論し、それを外化することが可能な環境であった。

今年度の2名のメンタリングは大きなホワイトボードと、情報を次々と提示するLAN環境がなければ成し遂げられなかったと筆者は考える。

会話での情報共有も重要であるが、内容を構造化し、客観視する機会を与えることにより、今まで教育方略を無意識に使用していた人が、点を線にすることを助けるように筆者は感じた。

メンタリングの難しさを再認識 (古田和久)

第20回TPWSにおいて、メンターを担当させていただいた。今回で4回目のメンターであったが、初めてメンターを担当したときと同様、WS前は、メンティーが納得してもらえらるTPが書けるようなメンタリングができるのかという不安と、異分野の方との出会いの楽しみとが混じりあっていた。

今回のメンティーの専門分野は語学系でベテランの域の教員であるが、スタートアップシートに目を通したところ、現在の教育機関に属してあまり時間が経っていないとのことであった。スタートアップシートのTPを作成する目的には「大学のテニユアトラックプログラムの一環として」という一文だけが書かれていた。今まで担当したメンティーは、概ね自己省察や教育改善のためなど能動的理由であったので、テニユアのためという一見受け易い理由とも思える理由は初めてであり、メンタリングにおける若干の不安材料であった。

第1回目のメンタリングでは、メンティーとメンターとの信頼関係を築く意味合いが大きいので、自分なりに気を配りながら話し始めようとした。しかし、メンティーの性格なのかどうかはわからないが、アイコンタクトをなかなか取りにくいことが生じてしまったのである。WS前に確認するメンターチェックリストには、「メンターは適度なアイコンタクトを行う」とあるが、最終メンタリングまでこれを実行できないままとなってしまった。メンティーは、こちらからの問いに対しては、比較的饒舌に話していただけだったので、メンタリングは進んだのだが、アイコンタクトができないので、それによって成し得る掘り下げたディスカッションを、いまひとつやりにくい状況に陥ってしまった。

次に気になったのが、非常に筆が速いことだった。栗田氏が本校に来ていただくと、WSの2日目の昼食時の情報交換会では必ず「2日目で執筆が進むことは良くない兆候」の旨の話をされる。WSの2日目は教育の理念の掘り下げがメインになるので、多くのメンティーはここで筆が止まる。しかし、担当したメンティーは、瞬く間に理念について書ききってしまった。こちらとしては、一歩

掘り下げた理念がないかご検討してはと提案したが、これ以上はないという旨の返答があり、Rule of Twoの原則の下、それ以上提案ができることなく、そのまま最終日を迎えてしまった。「TPはメンティーのもの」であることが最重要だが、何かもやもやとしたものが残ってしまい、メンタリングの難しさを再認識したWSであった。

メンターを続けるにあたっての課題 (石丸裕士)

今回担当したメンティーは、技術者として豊富なキャリアを重ねられた後、常勤教員になって間もない方で、スタートアップシートによると、「教員経験が浅く、自身の教育が学生に役立つものになっているか自己省察したい。」との希望を持っておられた。今回、私は5回目のメンターで、これまで、高専教員3名、大学教員1名、看護師1名のメンターを経験してきたが、長年の社会経験を積み、私よりも年齢を重ねておられる方のメンターを担当するのは初めてであった。

また、今回のメンティーは、今回のWSのうち2日間でTPの骨格を作成し、次回のWSにて発表するというイレギュラーな日程でのTP作成に挑もうとしておられた。その分、5時間以上かけてスタートアップシートを仕上げられるなど、TP作成準備にかなりの時間を割いておられた。そのこともあり、1日目終了(初稿)時点でいつも苦勞するはずの目次がほぼ確定されるなど、過去4回(5人)のメンタリングでは経験したことのないハイスピードでTPのフレームが完成していった。

しかし、組織の理念とご自身の理念が一致していて、ご自身が普段採用されている教育方法に基づいて、ご自身の教育理念を整理できていない点、教育の範囲に、学生にこれだけは身につけて欲しいと感じておられる内容が明記されているものの、長年にわたる技術者としての経験を踏まえて、なぜその境地に至ったのかは記述されていない点、教員となって1年以内であることもあり、教育成果を示す客観資料がない点、など気になる点が複数あった。しかし、2日でTPの骨格を完成させることを優先し、2日目の朝のメンタリングでは、「教育成果は年度末を待って記載し、技術者としての豊富な経験を踏まえて、これだけは身につけて欲しいという教育方針を持つに至った理由をTPに書き込んで？」とだけアドバイスした。

しかし、その後仮完成したTPを読んだスーパーバイザーから、「次回WSまで時間もあるので、当初の目的達成のためにも、教育方法からボトムアップ方式で自身の理念にたどり着くよう記述内容を改善しては？」と指摘を受けておられた。メンティーがこのアドバイスに基づき、

次回WSまでにどのようにTPを改善するかはわからないが、メンターである私が、完成を優先して、自己省察を深める作業に二の足を踏んだため、メンティーには二度手間となったかも知れないと反省した。限られたリソースでのTP作成と本質の追求。このバランスをどこでとるのか。今回は特殊日程だったとは言え、メンターを続けるにあたっての最大の課題に直面した気がした。

やはり理念は難しい（井上千鶴子）

2018年度は大学教員の方2名のメンターを務めた。今回の2名は、どちらもTPについて十分な理解を持ってWSに臨んでおられたので、メンタリングはスムーズに始まった。また、お二人とも前歴も含めれば数年以上の教育歴をお持ちだったので、教育経験・教育改善の取り組みにも不足はなかった。それでは、何の苦勞も無くTPが作成できるかという、それがそうでもない。実は理念の整理は迷走を極めた。

「迷走」と言う用語弊があることをまずは断っておく。論文を書き慣れている人は、方針さえ決まれば、TPの文章を作成することはそれほど問題ではない。また教育経験のある人は、方針さえ決まれば材料には事欠かない。とすると、3日間のWSでなすべきこと、WSだからこそでできることは、理念をじっくり考えることだと私は思っている。理念の議論を手早くまとめるようなことは慎み、納得いくまで考えてもらうようにしている。従って、前述の言葉は「メンティーは理念の整理にもっともエネルギーを注がれた」ことを意味する。

さて、なぜ理念の整理が迷走するのか。教育実績の少ない方であれば、理念先行と言うか、ある意味頭でっかちになることがあるが、一般的に実績の厚い場合は逆に、様々な現場でのニーズから生み出された教育手法が、必ずしもご本人が考えている教育の理想と真っ直ぐにつながらないことがある。そこを安易につなげようとしたりすると、なかなかうまくいかない。また、学校や学科の理念に強く共鳴しすぎる場合も、そこに引きずられてメンティー自身の本心を見つけることが困難になる。メンタリングでは、理念を導出する際に、なぜその学問を志したのか、理想とする先達があったかなどをお聞きすることがある。私は、特に思い当たらないという方には無理にはお聞きしないのだが、今回に限っては、恩師が病に倒れられてその意志を継ぎたいというインパクトのあるお話が伺えた。当然、恩師の言葉がキーワードになるものと考えメンタリングを進めたのだが、終盤に至って、メンティー自身が学生に伝えたいことは、別の言葉で言い表されることがわかってきた。恩師とメンティーは別

個の教育者なのだから当然なのだが、エピソードに引きずられてしまっていた。

メンターはわかりやすい物語を用意せず、敬意を持って虚心にメンティーに向かわねばならないと反省した。

5. 初等教育のTP

初等教育の先生が書くTP（北野健一）

冬のWSで、小学校教諭のメンターをさせていただいた。これまでに本校のWSで180名、日本全体で1,000名弱がTPを書いているが、小学校の先生が書かれるのは、日本初である。今回ご縁があり、その方のメンターを担当させていただくことになったが、半分緊張しながらも半分は平常心で臨んだ。というのも、この方は2017年12月に東京大学で開催されたTPチャート作成WSに参加され、ご自身が主宰されている会でTPチャート作成WSの講師を2018年3月、7月、11月と3回務めておられた。つまり、TPチャートでは、何度もご自身の教育を振り返られ、すでにしっかりとした理念をお持ちであることが想像できた。しかし、3日も貴重な時間を割いて本校のTP作成WSに参加していただくからには、TPチャート作成よりも、より深い気付きを得ていただかないといけない。

WSでは「なぜ教員を志したのか」から始まり、実にいろいろなお話をさせていただいた。私自身、小学校の先生とじっくり話したことがほぼ皆無であり、実に新鮮であった。考えてみれば当たり前のことだが、小学校では1年生相手と、6年生相手では、学校種が違うくらいアプローチが異なる。しかし、来年度何年生の担任になるかは直前までわからない（その前に別の学校に転勤になっているかもしれない）。つまりその年度の授業準備は直前までできず、しかも全教科を教えるのが基本なので、自然と自転車操業にならざるを得ないとお話であった。それに比べれば、私の環境はなんと恵まれていることか。私もこの数年、新しい科目を担当させていただくことがあり、授業準備が大変だと思っていたが、この話を聞くと全く比にならないことがわかった。

そのうち最終日になり、無事TPをまとめられたわけであるが、この方の基本的な考え方は「学校は社会で共に生きていくことができる大人になるための練習をするところ」であり、取り組む基準は「社会で必要と考える力を身につける練習を、授業をはじめ、あらゆる学校活動で取り組む。」であった。これには正直驚いた。高専でもそのまま通用するからである。大切なことは子どもの年齢にはあまり関係しないのである（もちろん子どもの成長段階でできること、できないことはある）。

TP作成が2018年12月であるが、この方は2019年2月に東京大学で開催されたTPチャート&ティーチング・

ステートメント作成WSにも参加され、さらに自らの教育改善に務めておられた。さらに4月にもご自身が主宰されている会でTPチャートとティーチング・ステートメントを作成された。本当に頭が下がる。

本校で年2回開催しているTP/AP作成WSでは、初等・中等・高等教育関係なく、真面目に熱意を持って、日々真摯に教育に取り組んでおられる先生の実践を拝聴することができ、常に良い刺激を受けている。これまで参加していただいた皆様に厚く感謝申し上げます。

6. スーパーバイザーを担当して

AP・TPスーパーバイザーを経験して（東田卓）

これまで、AP・TPのスーパーバイザーを経験して、多くの先生方のポートフォリオを読ませていただいた。スーパーバイザーの醍醐味は多くのメンティーのAP・TPを間接的ではあるものの、寄り添って読むことができることである。これまで5回のスーパーバイザーを経験し、ようやくスーパーバイザーとしての仕事がわかってきたと考えている。スーパーバイザーの用務はメンター・ミーティングを主催し、メンティーのポートフォリオを読み込み、メンターのコメントに適切なアドバイスすることである。メンティーによっては朝になってもなかなか原稿が出てこず、事前の読み込みが不十分なこともあるが、ポートフォリオのメンティーが6名おれば、6本を最低それぞれを2回ずつは読み込まなければならないので、短時間でかなりしっかり読み込む必要がある。

2018年の冬はスーパーバイザーとしてTP4名とAP2名のメンターチームを担当した。メンティー・メンターとも学内・学外、若い方・経験深い方などいろいろな方がおられたのも今回の特徴であった。本紀要の別報で、メンター目線から感じる「スーパーバイザーのありがたみ」を長く書いたが、状況によりメンターは大変苦勞が耐えない。ポートフォリオを寝る間も惜しんで熟読し、2泊3日があっという間に過ぎることもあれば、なかなか執筆される原稿が進まず「このメンタリングで良かったのか」と自問自答するときもある。スーパーバイザーの仕事は「酒場の女将」と表現されているが、メンタリングがうまくいかない場合、かなりの経験者であってもメンタリング方法に誤りがあったのか？執筆指針がうまく進むように持っていけなかったのか？など悩むことが多い。良きスーパーバイザーはメンターの心を癒やす重要なサポーターでなければならないと考えている[3]。メンティーに良いポートフォリオを書いていただくのがWSとして最も大事であるが、スーパーバイザーはメンター・ミーティングでメンターの成長を見守りつつ、メンティー・

メンターに常に寄り添う必要もあると考えている。

今回のWSでもメンターミーティングでトラブルの報告もあり、いろいろな意見が出たものの、概ね順調に進行した。メンターにとって良いメンター・ミーティングの主催ができたかどうかのアンケートは取っていないが、極端に悪いメンター・ミーティングであったとの報告は受けていない。今後も良きスーパーバイザーとなれるよう、WSでの経験を積みたい。

7. おわりに

以上の報告と考察から、メンティーはもとよりメンターにとっても自身の教育の振り返りや教員としての成長といった、教育改善効果が確認された。まだ納得のいく完成を見ないメンティーもあったが、そもそもTPに完成はなく、教育者の実践とともに成長（更新）していくのである。飽くことなく書き継いで行かれることを楽しみにしたい。

メンティーとメンターの組み合わせは、専門分野や普段の人間関係が近すぎる組み合わせは避けているが、同じ組織に属する人同士を組み合わせるかどうかは、WSによって考え方が違う。本研究会のWSでは、発足当初から両方の組み合わせを、参加者の個性や環境を考慮しながら行っている。異組織同士であれば、組織の柵を気にせず自分の考えを述べるのがメリットであることは言うまでも無い。しかし同じ組織や近い学校種であることで、メンティーが学ぶだけでなく、メンターが学ぶことが多いのも事実である。また、高等学校や小学校など、高専とは並列・直列の関係にある学校種の教員との交流からも多くの発見があることが、今回報告された。

学校単位でのWSは、メンティーを学内に限るところも多い中で、本校のWSはメンティー・メンターとも学外者を受け入れている。本校でのWS開催を視野にメンター経験を積みに来られる方もある。「府大高専をTPのメッカに」を合言葉に続けてきたWSであるが、本WSを母体として次々と新しいWSが生まれていくことで、少しは目標に近づけたのではないかと思う。この原稿がこれからTPを作成する諸氏及びTPWSの実施を考えておられる教育機関の参考になれば幸いである。

謝辞

本研究は、[JSPS 科研費 JP17K01001](#) の助成を受けたものです。

参考文献

- [1]北野ほか：日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して，大阪府立高専研究紀要，第43巻，pp. 63-70(2009).
- [2]北野ほか：第2回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告，大阪府立高専研究紀要，第44巻，pp. 57-64(2010). 以降第52巻まで毎年報告を掲載している
- [3]大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編著，実践 ティーチング・ポートフォリオ スタ
ーターブック～実質的な教育改善活動を目指して～，NTS出版(2011) .
- [4]ピーター・セルディン著，大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳：「大学教育を変える教育業績記録」，玉川大学出版部(2007).
- [5]吉田大輔：大阪府大高専・3年次・国語における4つのキーワード：「抽象」「具体」「類似」「差異」の実践，大阪府立大学工業高等専門学校紀要，第52巻，pp. 35-46(2018)